

開催地名：神奈川県逗子市	
開催日時	令和4年2月23日（水） 10:00～11:30
開催場所	逗子市役所5階第5会議室
語り部	菊池健一（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織及び自治会町内会等の市民 50名
開催経緯	<p>東日本大震災発生直後は、災害対策への高い関心を見せていた市民であるが、災害発生の経年と共に市民全体の意識の低下は否めない状況である。また、本市の高齢化率は著しく、市民に最も近い共助組織である自主防災組織の存続も危ぶまれており、行政として推進している自助・共助への影響も深く、若手防災リーダーの育成が急務となっている。</p> <p>このことについて、例年開催している総合防災訓練等において、様々な取り組みを実施し、若年層の取り組みを図っているところであるが、実感が乏しいところであることから、過去、本災害伝承プロジェクトに当選し講演を開催させて頂く機会をいただき、開催告知直後から問合せがあるなどの近年にない高い関心を得られた本事業の実施を要望するところである。</p>
内容	<p>(1) 災害時の対応</p> <p>災害時の避難所では複数の町内会の方や近くにいた方が集まってくる。このため効果的に運営を行うには現場で迅速な判断と的確な指示をする必要がある。東日本大震災の経験から、避難所運営においては時間の余裕もなく、日頃からの訓練や地域コミュニティがいかに大事だとわかった。</p> <p>実際に災害になったときに公的機関は頼りにならず、大規模になればなるほど機能不全に陥ることが予想される。このため自助・共助が重要になる。</p> <p>(2) 東日本大震災から学んだこと</p> <p>チリ地震の時は何も知らないうちに地震が来て142名の方が犠牲になった。その後もさまざまな地震が続き2003年宮城県沖地震があり、死者28名が出た。その内18名が子どもで、ブロック塀の倒壊からの被害となった。建築基準法が分かり、ブロック塀に芯を差し込むことが決まるなど、震災を経験するたびに何らかの変化が生まれている。しかし、災害は常に我々の想像を超えてくることを考えなければならない。</p> <p>実際に東日本大震災で津波の被害に遭った中には、沿岸部のみではなく3km内陸の場所もあった。自衛隊は政府に映像を送り、政府のほうで対策</p>

	<p>を行っている。仙台の津波の高さは11mで、海の水が一つの壁になった。建築物を破壊するほどの威力を持った波が、890～900kmの速さで進んでいた。</p> <p>犠牲者数は仙台で918名、災害関連死245名だった。災害関連死とは、震災で助かったが、高齢者の方が寒さや肺炎などで亡くなっている。荒浜地域では190名が亡くなられた。荒浜地域では平地のためご遺体が発見されやすかった。建物の大規模半壊2万6,500軒。ライフラインはほぼ1カ月かかり、電気は11日、携帯は10日で復旧した。</p> <p>避難所に避難したのは高齢者や女性が多かったので移動にも時間がかかった。17時の時点で1,200名、翌日の朝には1,500名にもふくれあがっていた。体育館の中に指揮者もおらず混乱していた。</p> <p>仙台市では1週間道路も剪断されているため、自衛官や支援が来るのにも時間がかかり、避難した人だけで避難所を運営していかなければいけなかった。炊き出しを地元の民生委員や婦人部の方が、雪や雨が降る寒い中、朝4時から外で朝食をつくっていった。自宅避難の人まで集まってきて、避難所廻りをしていた方もいた。一番大変だったのが女性の下着や生理用品の準備がなかったことだ。今後も災害が発生することは間違いないことから、是非このような物についても準備をしてほしい。</p> <p>(3) 命を守るためにすべきこと</p> <p>被害を最小限に食い止めるため、日頃からの訓練と普段からの地域のコミュニティ、町内会活動に参加するなどのことを大事にしてほしい。防災訓練の多くは避難することに焦点を絞っている。しかし避難をした後の訓練も必要であることを覚えていてほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>避難訓練については多くの年代の人々にとって馴染み深いものだと思うが、実際の災害時には避難をした先での対応も重要になることを実感した。</p>